

ハイデルベルク信仰問答講解説教23「ただ信仰によって」(2012年2月5日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。(創世記15:5-6)

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。(ローマ1:16-17)

【説教】

今日は、第23主日のところ、問59-61までを読みます。この前のところまでが使徒信条についての問答でありました。この一連の使徒信条の内容を受けて、今日の問59があります。「これらすべて」というのは、使徒信条の内容すべてと理解してよいでしょう。この使徒信条に言い表された信仰を信じることは、あなたにとって今どのような助けになるのかと信仰問答は問うています。

この間、娘が算数の問題を解きながらこういうことを言いました。「これがどんな役に立つの？」子どもはよくそういうことを聞きます。「なぜこんなことをするの」「これをするに本当に意味があるの」こういう素朴な問いかけはわたしたちが何かをする時に、少なからず感じることはないでしょうか。これが本当に助けになるのか。役に立つのか。信仰生活をする中でも、ふとそういうことを感じることはないでしょうか。信仰は果たして自分を本当に助けるだろうか。

その疑問に対して、信仰問答は、はっきりと助けになると断言します。その助けとは「わたしが、キリストにあつて神の御前で義とされ、永遠の命の相続人となる」ということ。ここでは「義とされる」ことが中心的な主題になります。その結果としてわたしたちは「永遠の命の相続人」となるのです。それが信じることで与えられる恵みです。そしてそれが今のあなたの助けになるというのです。

繰り返し説教の中でも申し上げていることは、聖書の示す救いは、神さまとの関係の回復ということ。それがすなわち「義」ということであり、神さまに正しいと認められるということ。ということは、わたしたちは神さまとの関係が悪かったということです。それが人間の罪の問題であり、そこに根本的な人間の救われなければならぬ現実があるのです。最初人間アダムとエバの墮罪から人間の罪の歩みが始まりました。人間は神さまを神さまとするのではなく自らを神としようとなりました。そのようにして神さまから離れていくのです。そこで人間は御前に「義」を失います。正しくなくなった。そしてその結果、人間は死に定められた存在になったのです。もはや永遠の命を受け継ぐことはできなくなります。

けれどもその人間がもう一度神さまの御前に義とされ、永遠の命を受け継ぐ道が開かれた。それがイエス・キリストによって成し遂げられた神さまの救いの御業であります。そのことを信仰問答はこれまで使徒信条の言葉を手がかりにして解き明かしてまいりました。具体的には、例えば問36受肉について「御自身の無罪性と完全なきよさによって、罪のうちにはらまれたわたしのその罪を神の御顔の前で覆ってください」と言います。また問37では十字架の苦しみについて「御自身の苦しみによって、わたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを獲得してください」と言います。更に問45でキリストのよみがえりについてこう述べています。「この方がそのよみがえりによって死に打ち勝たれ、そうして、御自身の死によってわたしたちのために獲

得された義にわたしたちをあずからせてくださる」キリストはわたしたちのために十字架で死に、よみがえってその義を獲得してください。そしてわたしたちをその義にあずからせてくださるのです。

問56罪の赦しのところではこう言います。問56を読みましょう。注意したいのは、キリストの義がわたしたちの義となるということ。これをキリスト教の教理では「義の転嫁」と言います。それは本来キリストの義であるものが、わたしの義となる。キリストが実現した義がわたしの義となる。そういう仕方であつたは御前に罪を赦され、義とされるのであります。それは今日の問答でも問61に「ただキリストの償いと義と聖だけが神の御前におけるわたしの義なのであり」と言われていることです。ではその義の転嫁はどのようにして起こるのか。それが今日の問答問60で言われていることであります。

ここに「ただイエス・キリストを信じる、まことの信仰によってのみです」と言います。キリストの義は、ただ信仰によってわたしの義となるのです。「ただ信仰によって」これは「信仰のみ」(ソラ・フィデー)と言って、宗教改革者が改革の旗印として掲げたことであります。所謂、信仰義認の教理です。ルターは、どのようにしてわたしたちが御前に義とされるかを真剣に問いました。最初ルターはわたしたちの行いも必要ではないかと考えます。しかし彼が神さまを喜ばせようと良き業に励めば励むほど、彼は神さまを憎むようになります。つまり彼の業はいつとも不完全で、決して神さまを満足させるものにはならないからです。できないことを要求する神さまに対して彼は嫌悪感を抱くのです。しかし、彼はある時に答えが与えられます。今日読んだ御言葉、ローマの信徒への手紙第1章17節に出会います。「正しい者は信仰によって生きる」そこで彼は信仰義認の教理を確信しました。信仰によって義とされること。わたしたちが御前に義とされるために必要なものは信仰だけだということです。アブラハムもそうでありました。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(創世記15:6)

このことは今日の問答の中で繰り返されています。問60「わたしがこのような恩恵を信仰の心で受け入れる時だけ」問61「ただ信仰による以外に、それを受け取ることも自分のものにすることもできない」ではここで言う信仰とはどういうものか。「まことの信仰」と言われます。幾つかの解説書が今日の問答と問21との関係を指摘しています。「神が御言葉においてわたしたちに啓示されたことすべて」というのはキリストの十字架と復活による罪の赦しと理解してよいでしょう。御言葉は常にそこに集中しています。そのキリストの福音に対する「確かな認識」と「聖霊がわたしのうちに起こしてください心からの信頼」それがまことの信仰である。キリストの御業を認識し、そして信頼してそこに委ねること。それを聖霊が起こしてくださいから信仰もまた恵み、賜物であることがここで言われます。信仰は自分で生み出したり、磨いたりするものではない。それもまた与えられるもの。その与えられたまことの信仰によ

って、わたしたちは神さまの御前に赦されて義とされるのです。ですから救いは徹頭徹尾、神さまの御業であり、わたしたち人間の出る幕はないということです。わたしたちはただ信じてそれを受け取るだけなのです。

よくよく注意したいのは、時として信仰すら自分の功績と考えることです。よく「あの人は立派な信仰を持っている」とか「自分の信仰はまだまだ」とか言います。信仰が神さまからの賜物であるならば、信仰が立派だとか、立派でないというような評価は人間にはできないということです。神さまの与えてくださるものに対して人間が良い悪いを評価していることですから傲慢もはなはだしいことです。でもそのようにして人間は、自分で甲乙をつけたがる。勝手に価値をつけるのです。そうやってせっかくの恵みを恵みでないものにしてしまうのです。問61はその点をはっきりと指摘して「わたしが自分の信仰の価値のゆえに神に喜ばれるというのではなく」と言います。

昨日、坂牟田兄の記念会があったのですが、お弟子さんたちがご自宅を整理して、坂牟田さんの聖書や教会学校の説教ノートなどを取っておいてくださいました。わたくしの手元にも幾つかいただきまして、その中の使い古された新約聖書を眺めておりましたら、その最後のところに、「信じます。不信仰なわたしをお助けください」という御言葉が書いてありました。マルコによる福音書に、汚れた霊に取り憑かれた息子を癒していただいた父親の話がありますが、その父親が言った言葉であります。この御言葉を彼は大切にしていた。わたくしはそこに坂牟田さんの信仰を改めて見た思いがしました。教会の長老を務められ、教会学校の教師も半世紀にわたって務められた。説教ノートにはびっしりと小さな文字で準備されたことが記され、時間をかけてよく調べられていたことが分かります。その方がいつもこの御言葉に立っていた。「信仰のないわたしをお救いください」彼は自分がしているとは考えていない。むしろ自分には何も無い。信仰すらない。神さまに助けていただかなければ何一つ出来ない。彼の信仰も、働きも、すべて彼の中から出てきたものではない。神さまがお与えにならなければ、自分には何も無い。でも神さまが与えてくださるからこのわたしが用いられている。そこに立つこと。信仰は自分の手柄でも、自分が稼いだ分の見返りでもないのです。それはどこまでもキリストの義であり、わたしたちはそれを受けるだけなのです。そこに立つことが、わたしたちの奉仕を喜びとし、感謝とするのではないか。そしてそこから、決して尽きることのない信仰の歩みが造られていくのだと思います。

この恵みを信じて受け入れることが、実に驚くべき義の転嫁をそこに起こすのです。問60「神は、わたしのいかなる功績にもよらず、ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とをわたしに与え、わたしのものとし、・・・」以前、問56のところでは罪の赦しについて、神さまはわたしの罪をお忘れになる。この忘れてくださることが慰めだということを行いました。そこに完全な赦しがあります。本当に赦すことは忘れてくださることだ。それが今日のところにも繰り返される。「あたかもわたしが何一つ罪を犯したことも、罪人であったこともなく」まるで最初から罪人でなかったように。それは神さまの御前にわたしたちは全く新しい人間として立つということです。Ⅱコリント5：17「キリストと結びられる人は誰でも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」恵みによってわたしたちは新しくされ、御前に祝福された新しい人間として再出発できる。これは何という慰めでしょうか。それが今のわたしの助けにならないで何になるでしょう。この新しさをもって日々生きることが出来る。このキリストの義をまとって、何をばかすることもなく、うしろめたさを感じることもなく、前を向いて前進することができるのです。そこに新しい一歩を踏み出す力が与えられるのではないのでしょうか。祈りをささげます。